

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 20 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350928

研究課題名(和文) 病弱教育におけるキャリア発達支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a Career Education Program for Hospitalized Children

研究代表者

谷口 明子 (TANIGUCHI, Akiko)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：80409391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、院内学級における病弱児対象のキャリア発達支援プログラムを開発することを目的とした。協働的な参加型アクションリサーチの手法に則り、病弱教育担当教師と研究者が協働して研究を進めるスタイルを採用した。

病弱児本人や保護者、教師たちへのインタビュー調査および質問紙調査から、病弱児の社会的自立に必要な力として「自分のことを他者に説明する力」が重要であることを明らかにし、その育成をねらいとする院内学級における教育プログラムを開発・提案した。

研究成果の概要(英文)：Hospitalized children often face developmental crises for their lack of social experiences and need to deal with some difficulties in their social independence even after becoming adults. The purpose of this study was to develop a new career education program for hospitalized children.

I adopted collaborative action research method, and collected descriptive data of hospital school teachers and semi-structured interview data of 2 child-cancer survivors and 1 parent of a cancer child. The main results were as follows; 1) teaching the way of “explaining illness to healthy classmates” is found to be the key in career education for hospitalized children, 2) 12 categories of educational objectives emerged from qualitative analysis of data, and consequently, 3) a new career educational program for hospitalized children was proposed.

研究分野：教育心理学、特別支援教育(病弱)

キーワード：病弱教育 院内学級 キャリア教育 プログラム開発

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 特別支援教育におけるキャリア教育研究  
平成 19 年以降、教育界ではキャリア発達を長期的視野の下に支援する姿勢が明確となり、従来の実践の見直しや新たな授業づくりの取り組みが展開している。特別支援教育においては、平成 21 年の特別支援学校学習指導要領の改訂において職業教育とキャリア教育の充実が要点として示されて以来、普通校に一步遅れてキャリア教育へ関心が向けられ、研究課題としても取り上げられるようになった(菊池, 2011)。

知的障害を有する子供を対象とするキャリア発達支援の授業分析や(木本・菊池, 2009)、肢体不自由特別支援学校におけるキャリア教育の視点からの教育課程の見直しに関する研究(田添, 2011)等が発表されているが、病弱教育領域のキャリア発達支援を扱った研究は見当たらないのが現状である。

谷口(2010)は、病弱児の社会的自立に向けたキャリア教育の重要性について指摘し、院内学級の校内研究支援という形でキャリア発達支援実践にかかわってきたが(谷口, 2012)、それらはまだ緒についたばかりであり、体系だった支援プログラムとして提案するには至っていない。病を抱える子供たちの社会的自立を保障するためにも、療養中の教育的環境におけるキャリア発達支援研究が求められている。

### (2) 病弱児を対象とする教育実践研究

病弱児のプライバシー保護の問題等から、本分野の先行研究の少なさは内外で指摘されている(上野・高木, 1975; Bolton, et al., 2000)。筆者は、平成 9 年以来、院内学級におけるフィールドワーク研究を継続しているが(谷口, 2000; 2009; 2011 他)、病弱児には、独自の育ちの課題があることが指摘されている。

具体的には、学習の遅れによる焦りや劣等感が強く、根深い不安や葛藤を抱えていること、長期間の療養からくるいらだちから短気・衝動的であること、過保護な家庭環境から依存的・消極的で根気がないこと等が挙げられており(Lavigne & Faier-Routman, 1992; 船越ら, 1984; 谷口, 2004; 泉, 2008 他)、将来の社会的自立に困難を抱えることが懸念されている。

一方で、かつては死病とされた小児がんでさえ治癒率が 7 割以上となり、病弱児の将来的な自立を視野に入れて療養中の教育を考える必要性が高まっている。病弱児のキャリア発達支援に関する研究は、まさに現在取り組むべき喫緊の課題と言える。

## 2. 研究の目的

本研究は、病弱児の教育的環境として重要

な意味を持つ院内学級におけるキャリア発達支援プログラムの開発を目的とする。具体的には、以下の 4 点を達成目標とする。

(1) 研究Ⅰ：通常学級及び特別支援教育領域におけるキャリア教育の基本理念や教育全体の中での位置づけを整理し、研究領域の理論的・制度的背景を明確化する。

(2) 研究Ⅱ：当事者が社会的自立をする上でどのような力が必要であると感じているのか、当事者のもつキャリア発達支援に関するニーズを探索的に把握する。

(3) 研究Ⅲ：病弱教育におけるキャリア発達支援について現状と課題を明らかにするとともに、教育の立場からどのような力が病弱児の社会的自立に必要であると感じられているのかを明らかにする。

(4) 研究Ⅳ：上記研究Ⅰ～Ⅲの成果をふまえ、院内学級における病弱児対象のキャリア発達支援プログラムを開発する。

## 3. 研究の方法

本研究では、「参加型アクションリサーチ」(Kemmis & McTaggart, 1998)の手法に則り、病弱教育担当教師と研究者が協働して研究を進めるスタイルを採用し、下記の研究方法を複合的に用いた。

(1) 研究Ⅰ：キャリア教育に関する文部科学省答申類、国立教育政策研究所研究報告、書籍、論文等の先行研究をレビューし、キャリア教育に関する理論・制度的背景の整理を行った。

(2) 研究Ⅱ：病弱児および保護者に半構造化面接調査を行い、面接データは逐語化して仮説生成型の質的分析を行った。

(3) 研究Ⅲ：病弱特別支援学校が発行する研究紀要に見られる指導実践事例の内容分析からキャリア教育の実態を明らかにするとともに、病弱教育関連の公開講演会時に施行した病弱教育担当教員 20 名他を対象とする自由記述質問紙調査に記述された「病弱児に“つきたい力”」を KJ 法によって整理・構造化した。

(4) 研究Ⅳでは、研究ⅡとⅢによって得られた当事者のニーズと支援の実際をすり合わせたうえで、新たなキャリア発達支援プログラムを考案・実践し、効果と今後の改善点について考察した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究Ⅰ：文献レビュー

キャリア教育に関する文科省答申や研究論文を辿り、「キャリア教育」がいわゆる職業教育という狭い枠組みでとらえるのではなく、より幅広く、長期的な発達過程における環境移行の支援、ひいては地域での生活を含めた生涯にわたる適応支援としてとらえることの重要性が明らかになった。特に、病弱教育におけるキャリア教育のとらえ方に関して、「移行支援」というとらえが適切かつ有効であり、そのとらえに基づくキャリア発達支援の必要性が高いとの知見を得ることができた。また、現場教員との研究討議から、支援の焦点を「現在の入院中期間」「復学後」「将来的な社会生活」のどの時点における適応に置くのかによって、支援を捉えなおすことの有効性も確認された。

##### (2) 研究Ⅱ：当事者のキャリア支援ニーズ

2名の小児がん経験者（現在は成人）、及び1名の保護者（母親）に半構造化面接調査を行った。インタビューデータは逐語録化し出来事ベースのコード化による質的分析により、カテゴリーを抽出した。結果として、「教師には入院中でも普通に教師として接してほしい」との指摘から、入院児独自のキャリア発達支援ニーズとして当事者に特段意識されている事柄は基本的にはないことが示唆された。

退院後の生活に関しては、保護者からは、本人の病気のことを周囲に知らせることは周囲の理解を得る上で有効であることは認めながらも、一般に医療関係者等に考えられているほど病気の告知がよい側面ばかりではなく慎重にならざるを得ないことが語られ、地域での生活の多様な側面から長期的な視野にたって考える必要性があることが確認された。

一方、小児がん経験者の立場からは、保護者同様に誰にでも本当のことを言う必要はないと感じることを指摘しつつも、特に退院後思春期において「どのタイミングで誰に自分の病気のことをどこまで話すか」が生活上の難しさとして語られ、他者からの理解と適切な対応を得るために自分の病気を他者に説明することが、社会生活を送る上で一つの鍵となることが浮上した。

##### (3) 研究Ⅲ：キャリア教育実践事例の内容分析

ある病弱特別支援学校において行われたキャリア教育実践の教育的意図を実践レベルで明らかにすることを目的として19の指導実践事例のねらいを検討した。

「主たるねらい」及び「関連するねらい」として挙げられた計67のねらいを「基礎的・汎用的能力」の観点から分類したところ、「人間関係形成・社会形成能力」に関するねらいが24（12実践）、次いで「自己理解・自己管理

能力」19（12実践）、「キャリアプランニング能力」12（8実践）、「課題対応能力」8（7実践）、その他が4（2実践）であった。また、「他者理解」（「人間関係・社会形成能力」に分類）が、19事例中12事例においてねらいとして掲げられていた。

谷口（2015）の“つきたい力”カテゴリーの観点からの検討の結果、全74の“つきたい力”のうち、「人間関係形成能力」が21を占め、次いで「自己肯定感・自己受容」の9、「自己表現力」「自分の病気理解」の6と続いた。病弱児の課題として人間関係を形成する力が強く意識され、キャリア教育として焦点をあてられていることが明らかになった。

##### (4) 研究Ⅲ：病弱教育担当教師にとって病弱児の社会的自立のために“つきたい力”

病弱教育担当教師への事前の聴き取りから、小児医療や教育政策の転換が著しい昨今の実情とキャリア発達支援とからめた講演を聴きたいとの現場ニーズが把握された。そのニーズを勘案し、本研究課題遂行の一環として、平成25年9月に文部科学省より講師を招聘し、講演会を開催した（参加者64名）。講演内容を通して、病弱児支援をめぐる医療や教育政策に関する情報収集を行うとともに、病弱教育担当教師が考える「病弱児の社会的自立のために“つきたい”力」について記述データを収集した。

一人あたり平均2.0個（0-4個）、全44個の記述が得られた。この44個の記述を、KJ法により整理、まとめたのが、以下のカテゴリー及び図1である（文中『 』は回答からの引用を示す）。

- ①自己管理能力：遅刻をしないなどの生活上の管理と自分の『自分の病気を適切に管理する』という病状をコントロールするための管理する力。
- ②自分の病気についての理解と受容：上述の病状自己管理の前提として病気を理解し受容していること。
- ③自己肯定感：病気になったことのマイナス面だけでなく自分のがんばりを認める力。病気であっても自分は自分と思える覚悟。
- ④自己決定力：自分で決め、自己選択できる力。
- ⑤あきらめない力：『病気だからできないとすんなりあきらめる癖』がついていることがあるため。
- ⑥自己表現力：自分の気持ちをストレートに話す力。
- ⑦人間関係形成能力：『集団の中に入って友だちと関係をつくる』『人と関わることを楽しいと思える』など、人間関係づくりや社会性にかかわる力。
- ⑧援助要請力：『助けてと言えること』『頼る力』『社会的支援についての知識』など

他者に援助を求める力。

- ⑨学力：勉強する姿勢や学習方法を身につけること。
- ⑩現実的に妥協する力：できないことがあっても「ま、いいか」と自分や周囲と折り合いをつける力。
- ⑪希望をもつ力：『病気を理解しつつ「ありたい」「なりたい」を考えられる力。病気経験を『プラスへ意味づけできる力』など、未来へ向かう力』。
- ⑫エンジョイカ：今、この時を楽しむ力。

以上より、病弱教育担当教師たちが、病弱児の社会的自立を思い描いた時、子供たちが病気という大きなネガティブ経験を背負っているからこそ今後経験するであろうさまざまな困難を乗り越えるための人間としての力をつけたい、或いは、自分の人生をよりよいものにするエネルギーをもたせたいと考えていることが明らかになった。この12の“つけたい力”を、研究Iで明らかになった「現在の入院中期間」「復学後」「将来的な社会生活」の3つの時間区分の中で重要とされるのかという時間軸の視点を組み入れて構造化したものが下の図1である。

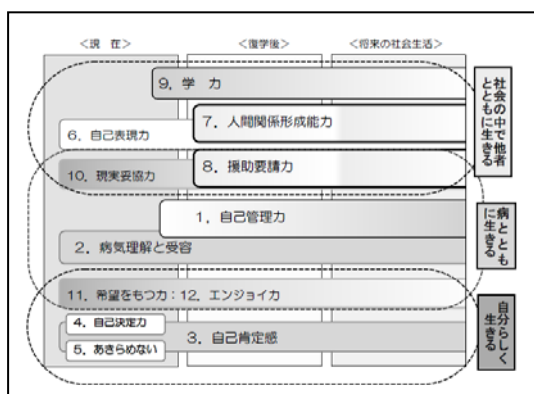


図1 病弱児の社会的自立のために“つけたい力”

図1に示した通り、12の“つけたい力”は、大きく「社会の中で他者とともに生きるために必要な力」「病とともに生きるために必要な力」「自分らしく生きるために必要な力」に大別される。この3つの観点、病弱児のキャリア発達支援を考える際にも有効な視点と考えられた。

また、特筆すべき知見として、“つけたい力”として、『助けてと言えること』『人を頼ることができる力』『甘えられる力』といった「援助要請力」が挙げられたことがあろう。従来の社会的自立の概念は、社会の中で他者に依存せず“独力”で生活するというものであり、他者に援助を求めるということは自立の概念に反するようと思われる。しかし、現実の社会的自立は様々な依存のもとに成り立っており、相互に依存し合える社会づくりが目標となることが先行研究においても示され

ている (Mathews & Seekins, 1987)。将来的にも、環境移行のたびにさまざまな壁を乗り越えなくてはならないことが予想される病弱児にとっては、“独力”にこだわるよりも合理的配慮を受けながら、換言すれば適切に“異存”しながら、自分なりの生活を立ち上げるという「自立」の考え方のほうが適切であることも示唆された。

#### (4) 研究IV：病弱児対象のキャリア発達支援プログラム開発

ある大学病院内にある病弱教育機関との共同研究体制が確立し、院内学級におけるキャリア発達支援プログラムとして、退院後の生活に焦点をあてた支援プログラムを開発した。

26年度末に訪問した米国ボストン小児病院における退院支援プログラムより、チャイルド・ライフ・スペシャリスト (以下、CLS) が復学先に出向いて、教員・クラスメート対象に病状や教育上の留意点を説明することがあるとの情報を得た。しかし、我が国においては、CLSは全国でも16名しか配置されておらず、その援助を広く期待することは難しい。病児の社会的自立のひとつの節目が退院時であること、また今後も環境移行のたびに周囲の支援を引き出していくことが欠かせないことの2点から、退院時適応に焦点をあてた「援助要請」のベースとなる自己理解とコミュニケーション力、特に、本研究課題の研究I・II・IIIの知見を踏まえ、「復学後に自分のことを説明する力」を育てることを目的とするプログラム開発に探索的に取り組んだ。

キャリア発達支援プログラムの具体的構成は下記のとおりである。内容考案に関しては、第1回と第4回は筆者が、第2回と第3回は連携先の病弱教育機関教員が担当し、実施は現場教員が担い、筆者は授業時に立ち会い、事後検討に参加した。

=====  
第1回「自分の気持ちを伝えよう」  
グループワークと分かち合い

第2回「院内学級のことを説明しよう(1)」  
ロールプレイ。

第3回「院内学級のことを説明しよう(2)」  
ロールプレイ。

第4回「仲間を増やせゲーム」  
ゲーム仕立てのワーク。  
=====

上記プログラムの詳細は本報告においては省略するが、「退院したら院内学級のこと友達に説明することもあるかもしれないから練習できてよかった」「自分の話を聞いてもらえてうれしかった」等の児童生徒のコメントから、教育活動としての意義は認められたと考えられる。

また、院内学級においてキャリア発達支援を考えるにあたり、「自分のことを他者に伝える力」の育成が重要な意味を持つこと、プログラム実施後の教師たちの所感から病弱教育現場においては入院中の子供たちにとって楽しい活動を提供したいというニーズが高く、真面目なテーマのプロジェクトよりもゲーム的要素のあるワーク等のほうが現場の特性によりフィットしていることが明らかになった。近年、教科教育方法としても注目される「ゲーミング・シミュレーション」の応用可能性が示唆された。

今後の課題として、本研究課題の成果を踏まえた発展的なキャリア発達支援プログラムを展開することが望まれる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 谷口明子, 入院児への教育支援と養護教諭の役割. 健康教室, 査読無, 67(7), 印刷中 (2016年6月刊行予定)

② 谷口明子, 病弱児の社会的自立のために“つきたい力”とはーキャリア発達支援の観点からの探索的研究ー. 東洋大学文学部紀要教育学科篇, 査読無, 68, 2015, pp. 111-120.  
URL : [https://toyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=7571&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://toyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7571&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

[学会発表] (計 11 件)

① 谷口明子, 病弱教育におけるキャリア教育の実際ー実践事例における「ねらい」の内容分析. 日本育療学会第 19 回学術集会, 2015 年 8 月 23 日, 東洋大学(東京都文京区)

② 谷口明子, 子供に病気をどう説明するか. 日本特殊教育学会第 52 回大会, 2014 年 9 月 21 日, 高知大学 (高知県高知市)

③ 谷口明子, 病弱児のキャリア発達支援(1)ー教員から見た社会的自立のために“つきたい力”とは. 日本特殊教育学会第 52 回大会, 2014 年 9 月 21 日, 高知大学 (高知県高知市)

④ 谷口明子, 院内学級における子ども観と発達支援. 日本質的心理学会第 10 回大会, 2013 年 9 月 1 日, 立命館大学 (京都

府京都市)

[図書] (計 2 件)

① 谷口明子, クリエイツかもがわ, 『病気の子どもの教育入門』, 2013, pp. 20-28.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

東洋大学研究者情報データベース/谷口明子  
<http://ris.toyo.ac.jp/profile/ja.63QLQ2TRofzU2rR2J6Bo1A==.html>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 明子 (TANIGUCHI Akiko)  
東洋大学・文学部教育学科・教授  
研究者番号 : 8 0 4 0 9 3 9 1

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし